2011.5.5 島田 孝

はじめに

G.ochoterenae または、G.ochoterenai の学名とされる植物は、和名; 武勲丸とされています。しかし、G.ochoterenae と言う植物は、狭い意味に捉えても、非常に変異が激しい植物のようです。日本に入って来た当時に、和名; 武勲丸と呼ばれていた植物は、G.ochoterenae の中でも、平均的な固体では無く、変種や品種として考えても良いような特別な個体ではないかと考えています。現在では、確実に和名; 武勲丸であると言う個体が少なく、G.riojense(=G.bodenbenderianum)類縁種のようなものも武勲丸と呼ばれていることもあり、整理して見たいと思います。

学術記載

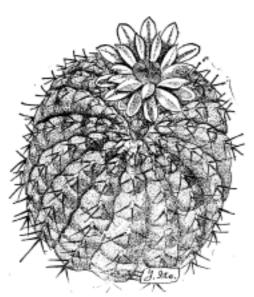
1935年に Backeberg 氏と Knuth 氏が著した Kaktus-ABC に学術記載されています。そしてその

に平坦になる。 刺座の周囲は 殆ど丸くなり、 白色か黄色の 綿毛が突き出

している。3-5

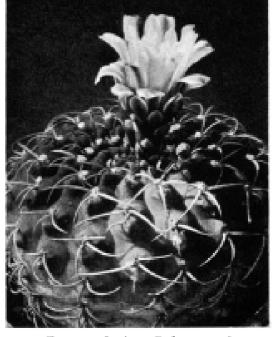
の縁刺、この

本の 293 ページに "29 番 Gymnoncalycium Ochoterenai Backb. 1935 北部アルゼンチン"と書き花の咲いた 1 枚の写真を載せています。(写真 1 参照) そして 417 ページにラテン語で学術記載しています。オーストリア・ギムノ愛好家グループ(AGG)の雑誌Gymnocalycium 4(5):71-76 (1992)の中でのドイツ語訳は以下のようになっています。:「平らな胴体、頭頂部は深く陥没し、剥き出し、まばらで、綿くずのような毛が生えている。暗いオリーブ系緑色(大抵茶色のコブ状隆起)稜数約 16 稜、この稜は最初、幅約 5mm、後



第 211 図 武勲文 (Gymnocalycium Ochoterenai Bckbg, 1935.)

図1:サボテン図説の武勲丸



Gymnocalycium Ochoterenai. 写真 1: Kaktus-ABC(1935)よりコピー

刺は、灰色か白い黄色、先端で黒くなる(このことは 293 ページに示された写真で繰り返し述べている)。1 本は真っ直ぐで、2 本は斜めで後ろに反り返って曲がる、花は長さ約 35mm、白色、花喉部は幾分赤みを帯びる、短い花筒部を持つ。」

伊藤芳夫氏のサボテン図説(Explanatory diagram of Austroechinocactinae)(1957)の 192 ページに武勲丸 (15)**Gymnoncalycium Ochoterenai** *Backb.* 1935 とし、彼

のペン画と共に以下のように記述しています。:「形態-鳳頭に似ているが、以下なるべく相違の点

を挙げて見よう。扁円状であるが、頂部がより偏平。体色はより黒色がかり、やまばと色、乃至は灰緑色。稜はより少なく、12-16 で、より瘤状がかっている。刺は外刺のみで 3-5 本有し、より長い(訳1.2cm)。新刺は黒茶色(基部紅色)であるが、後には骨色、乃至はさくらねずみ色化す。 花一花はより短く、より小さい(長さ 3-3.5cm、径 4-5cm)。内弁は淡桃色で、より濃色の中筋が入っている。外弁には、淡紅褐色の幅広い中筋が入っている。花喉の内側は帯紅色。花糸は淡黄色。葯は黄色。花柱、柱頭共帯黄色。花筒は暗紅褐色で、裸出し、桃色にぼかされた鱗片をわずかに有す。果実は、紡錘状で、帯紅褐色(第 211 図参照)。」(図 1 参照)

H.Till 氏と G.Neuhuber 氏は、AGG 誌 Gymnocalycium 4(5): 71-76 (1992)の中で Backeberg 氏の学術記載について、以下のように書いています。

「Backeberg 氏の学術描写は、幅広く分布し、非常に変化に富む種の中の、ひとつの影の薄い僅かなパーセントのものにのみ当てはまる。Backeberg 氏は同じページ(147ページ)に僅かに一つの変



写真 2: G.ochoterenai v. polygonum Kakteen-Lexikon(1966)コピー



写真 3:G.ochoterenai v. tenuispinum Kakteen-Lexikon(1966)コピー

種を学術記載していた。; Gymnocalycium ochoterenai var. cinereum *Backeb.* var. nov. ドイツ語訳によると;灰のような灰色、原種に比べてより小さく、根元が三角形状の瘤状隆起、4(-5)本のより短い不規則で、先端が殆ど黒ずんだ刺を持ち、より真っ直ぐである。

Gymnocalycium ochoterenai と変種 cinereum 学術記載は推察するに、少数の標本に対して著作された。・・・・中略・・・・最も異なった型の図による描写のみで、この種の変異の幅を公表している。同時に、一部に対する種の学術記載が、時々不十分であることが示される。すなわち変異の幅が認識されないままに放置されている。そのため、種の様々な型の集合体に不明確で不備な描像を与える。原種と変種に対し、刺についての学術記載、特にその色彩はまずい選択である。そしてそのような刺色は野生では殆ど稀にしか観察されない。通常刺は逆の色調をしている。すなわち刺の基部(根元)は大抵先端部より黒い、あるいは基部が黒く中間は明るい色になり再び先端で黒くなる。相対的に高い頻度で全体が一様な灰色をした刺を

持つ植物個体を見出す。同様に花の大きさも変わりやすい。若干大きな花は野生では少し大きな数の植物個体で、また栽培した場合は何度も観察できる。それどころか、完全に同じ個体でも、まちまちの大きさの花を咲かせることが起こりうる。Backeberg 氏は 1966 年発行の Kakteen-Lexikon の 171 ページに、種は極端に変異性に富むと引用し、さらに 3 つの変種 (var. polygonum, var. tenuispinum, var. variispinum) を学術記載しているけれども、全て命名法的に無効である。なぜならそれらの模式種が寄託されていないからである。これら"変種"の分布地域はこの種を採取した地域の中心に位置する。すなわち、今まで知られている発見地、Risa del Conlara, Concaran, Quines の 3 つの町で

形作られる三角形の中心に位置する。 (GN88-93,GN88-159,GN90-260,GN90-266,GN8 9-174,GN89-176,GN88-97) 全ての発見場所で

"tenuispinum型"が支配的であった、"polygonum型"は"tenuispinum型"の古い個体を別の名で呼んだもので、時折しか見つからない。より長く、捻じ曲がった刺を持つ"variispinum型"は同じように主要な分布地域で見つかるが、どちらかといえば分布地域の周辺部に生えている。幾つかのG.ochoterenaiの群生地では上で名付けられた"3つの型"のうち 1つか 2 つ、あるいは 3 つ全てが、典型種と同じであることが分るだろう。この事は

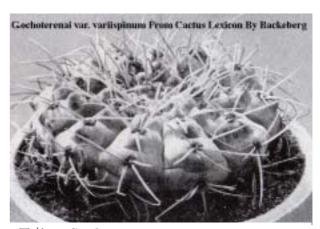


写真 4 : G.ochoterenai v. variispinum Kakteen-Lexikon(1966)コピー

1966 年 Backeberg 氏も触れていて、種の激しい変異性を強調した。それらの少し変わった型は、それ自身を分類学的な階級で登場させるという別の評価もあるが、我々には有意義とは思えない。むしろ以下の G.ochoterenai に対する拡大された、もしくは修正された記載が述べられるべきである。



Abb. 1665. Gymnocalycium ochoterenai v. cinereum Backsc.

写真 5: G.ochoterenai v. cinereum Backeberg, CactaceaeIII(1959)コピー

9~14mm 離れている。刺;3 本~5 本、放射状に出 る。胴体に沿って曲がったり、胴体から突き出す。 長さは不揃い、大抵長さ 12-15mm(最大 22mm)、 真っ直ぐから微かに曲がるか又は捩れる、突き錐形 状、少し傾き、硬直していて、角色、基部は黒くな る(長い刺はしばしば基部が黒茶色、中央部で明る い茶色、先端で黄色かかった白色に変わっていく)。 時々先端が基部より黒くなることがある。花;頭頂 部近傍の刺座に着く。漏斗形状長さ 45-55mm(最小 35mm、最大 65mm)直径 35-45mm(最大 55mm)、 真珠のような白色バラ色の光沢を持ちバラ色から 灰緑色までの鱗片を持つ。子房;僅かに円錐形状か ら円柱形状まで、長さ 15~22mm、直径 7~12mm 暗緑色、幅の広い丸みを帯びた、白い縁取りのある バラ色から灰緑色までの鱗片が付く。外花弁;先端 に小さな尖りを持つ。へら形状からスプーン形状ま で、長さ 18-26mm、幅 7-9.5mm(基部で幅 2-2.5mm) 白色系バラ色、緑色から灰緑色までの中筋がつく。先端は緑色で、基部はバラ色、内花弁;直線的形状から幅広のランセット形状まで、長さ 17-24mm 幅は先端近くで 8-9.5mm、基部で 2-2.5mm、バラ色の基部を持つ真珠のような白色、最内花弁; ランセット形状、15 x 6mm バラ色の基部を持つ真珠のような白色、雄蕊の最下部の 2 列は柱頭に隣接し外側に曲がる。残りの雄蕊は花筒の壁に張り付いて内側に曲がる。最上部の雄蕊は柱頭を抜きん出ている。(訳者註 inseriert は insistiert?の間違いか? 適当な意味が見つからない); 花糸; 細く、長さ 6-8mm 緑色から緑系黄色、葯; 2.5 x 0.9mm 明るい黄色、花粉は黄色、花柱; "子房中位の"、長さ 13-14mm 直径 2mm、緑色系黄色、10-12 個のクリーム系白色の長さ 6mm の柱頭分裂片、密室;高さ 3-4mm、直径 4-5mm バラ色、果実箱;縦長心臓形状、高さ 14mm、広さ 6mm、白い壁のよう、果実;逆向きの西洋梨形状、高さ 26mm まで、直径 15.5mm、緑色、縦方向に開裂、種子索;白色、種子;帽子形状、ハイラムピラー領域に馬蹄形状のコブ、原産地;アルゼンチン San Luis 地方、Sierra de San Luis 山脈の北部突出部、海抜 600-950m。」



写真 6~8(左から): G.ochoterenae GN89-206(Piltz 種子) 筆者栽培・撮影、 G.ochoterenae v. polygonum Uhlig 輸入苗 筆者栽培・撮影、G.ochoterenae v. scoparium LB383(Piltz 種子) 谷山 宰氏栽培・撮影



写真 9~11(左から): G.ochoterenae v. variispinum 筆者栽培・撮影、 G.sp. Quines Uhlig 輸入苗 筆者栽培・撮影、G.ochoterenae ssp. herbsthoferianum LB386(Piltz 種子) 谷山 宰氏栽培・撮影

H.Till 氏と G.Neuhuber 氏の記述からすると、Backeberg の 3 つの **G.ochoterenai** 変種(**var. polygonum**, **var. tenuispinum**, **var. variispinum**) は、単に **G.ochoterenae** の変異の幅の中に含まれ

るようです。Uhlig などから、**G.sp. Quines** として輸入されたものは、その主要な産地 **Quines** から見て **G.ochoterenae** であると思われます。一方、彼らは、同じ文献で、分布地域の周辺部に位置する

個体群は、分布地域の中 央部にあるものよりは、 より画一的になること を確信できるとし、 Backeberg 氏の G.ochoterenai v. cinereum を有効とし、 新たに Gymnocalycium ochoterenai var. scoparium Till & Neuhuber と Gymnocalycium ochoterenai ssp. herbsthoferianum



写真 12,13: **G.ochoterenai v. cinereum** AGG 誌 1992, P73 コピー(左)、**v. cinereum** としての輸入苗(右) 谷山 宰氏栽培・撮影

Till & Neuhuber を学術記載しました。

和名;武勲丸とは

武勲丸と言われるものは、上記学術記載の範疇には含まれていると思いますが、昔の白黒写真を見ての判断ですので、判定は難しいですが、これまでに取り上げた写真では、**G.ochoterenae v. cinereum** の白黒写真が比較的近いような気がします。

一方、最近 G.ochoterenae として流通している植物は、上記カラー写真の 6、7、9、10 のような植物と合致しますが、日本で武勲丸と言われているものとは大分違います。写真 12、13 の

G.ochoterenae v. cinereum は、まだ若いので、武勲丸と 言われているものかどうか の判断は難しいです。

個体差はあるようですが、 **G.ochoterenae** 系は、刺全体 が黒いものや白いものがあ りますが、H.Till と





写真 14,15: 40 年以上前の Uhlig 種子の **G.ochoterenae** 武勲丸?(左) と伊藤芳夫氏のサボテン大図鑑の武勲丸(右)

G.Neuhuber 両氏や伊藤芳夫氏が書いているように、基本的には刺の基部が、やや濃いと思います。 G.riojense(和名;守殿玉) (=G.bodenbenderianum sensu Kiesling)系統のものが G.ochoterenae とし

て輸入され、武勲丸とされている場合がありますが、この系統は刺の基部は、濃くありません。武勲丸と言われるものは、直刺で、3本から5本、肌色は G.ochoterenae より濃く、通常、灰褐色ですが、日光が強いと茶褐色になるように思います。インターネツトで、チェコのギムノ研究家の Martin Tvrdic 氏や Tomáš Kulhánek 氏の種子リストを見ると、G.ochoterenae var. n. Chocolate flat body



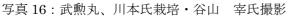




写真 17: **G.ochoterenae**、Dodie 社(USA)からのもの、筆者が栽培していたが大分前に枯れた。これは、**G.riojense** 系統と思われる。

とし、肌色が茶褐色の変種や品種レベルのものがあると記されていて、この種がどのようなものかを 知りたいところです。しかし、この種の産地は、**v. cinerium** とは離れた場所にあります。

G.ochoterenae 類縁種

G.ochoterenae 類縁種の学術記載の時系列は以下のようです。このなかで、日本で人気のある G.vatteri は、現在の分類では、G.ochoterenae の亜種として考えられています。分類を大きく捉える Graham Charles 氏は、表に挙げた、すべての種は、すべて G.ochoterenae と考えています。趣味家から見れば、彼のように種の概念を大きく捉えると、その事を理解せず、同じ種であると誤解した人により、雑交配の原因になるように思います。欧米では、Field 番号が管理されていて、その様な事は、少ないのかも知れません。日本で流通している、G.sp. Hig(ヒグ・La Higuera のこと)は、G.intertextum、G.sp. Serr(セル・Serrezuela のこと)は、G.moserianum されているもので、この種は、G.intertextum の変種や品種として考えられている分類学種です。

表 1: G.ochoterenae 類縁種の学術記載の時系列

1935	Gymnocalycium ochoterenai Backeberg
	in Backeberg & Knuth: Kaktus ABC: 293, 417 (1935)
1935	Gymnocalycium ochoterenai var. cinereum Backeberg
	in Backeberg & Knuth : Kaktus ABC: 293, 417 (1935)
変種として考えない研究者も多い。	
1966	Gymnocalycium ochoterenai var. polygonum Backeberg nom. inval. (Art.8.2)
	Kakteenlexikon : 171 (1966)
Gymnocalycium ochoterenai <i>Backeberg</i> の変異に含む。	
1966	Gymnocalycium ochoterenai var. tenuispinum Backeberg nom. inval. (Art.8.2)

	Kakteenlexikon : 171 (1966)	
Gymnocalycium ochoterenai <i>Backeberg</i> の変異に含む。		
1966	Gymnocalycium ochoterenai var. variispinum Backeberg nom. inval. (Art.8.2)	
	Kakteenlexikon : 172 (1966)	
Gymnocalycium ochoterenai <i>Backeberg</i> の変異に含む。		
1966	Gymnocalycium moserianum Schütz nom. inval. (Art.37.1)	
	Novy popis-Gymnocalycium moserianum Schütz sp.n Kaktusy 2(2-3) : 28-30 (1966)	
Gymnocalycium intertextum <i>Backeberg</i> の変異に含む。G.intertextum の変種や品種と考え		
る人もいる。		
1966	Gymnocalycium intertextum Backeberg nom. inval. (Art.8.2)	
	Kakteenlexikon: 169, Abb. Seite 566 (1966)	
Gymnocalycium intertextum Backeberg ex H.Till として有効化		
1985	Gymnocalycium intermedium Piltz nom. nud. in Piltz Samenliste 1998	
1960	in Meregalli, M.: Il genere Gymnocalycium Pfeiffer Piante Grasse 5(1): 28 (1985)	
Gymnocalycium ochoterenai subsp. vatteri と Gymnocalycium intertextum の中間タイプ		
	Gymnocalycium intertextum Backeberg ex H. Till	
1987	Validierung einiger ungültig veröffentlichter Taxa von Gymnocalycium Pfeiffer, -	
	KuaS 38(8): 191 (1987)	
	Gymnocalycium ochoterenai subsp. herbsthoferianum $\textit{H.Till \& Neuhuber}$	
1992	Die Arten des Gymnocalycium bodenbenderianum Aggregates - 2.	
	Gymnocalycium ochoterenai und seine Formen Gymnocalycium 5(4): 75 (1992).	
1992	Gymnocalycium ochoterenai var. scoparium H.Till & Neuhuber	
	Die Arten des Gymnocalycium bodenbenderianum Aggregates - 2.	
	Gymnocalycium ochoterenai und seine Formen Gymnocalycium 5(4): 74 (1992).	
1993	Gymnocalycium ochoterenai subsp. vatteri (Buining) Papsch	
	Die Arten des Gymnocalycium bodenbenderianum Aggregates - 3.	
	Gymnocalycium vatteri und seine Formen Gymnocalycium 6(1): 79 (1993)	
1992-93	Gymnocalycium ochoterenai var. unguinispinum nom. nud.	
	Wolf, R.: Internationaler Einkaufsführer 1(1) (1992-93)	
1992-93	Gymnocalycium ochoterenae var. variicolor nom. nud.	
	Wolf, R.: Internationaler Einkaufsführer 1(1) (1992-93)	
1993	Gymnocalycium ochoterenai subsp. vatteri var. altautinense $Papsch$	
	Die Arten des Gymnocalycium bodenbenderianum Aggregates - 3.	
	Gymnocalycium vatteri und seine Formen Gymnocalycium 6(1): 79-80 (1993)	
1999	Gymnocalycium ochoterenai var. albiflorum nom. nud.	
	in Lukasik, E.: Synonymie rodu Gymnocalycium : 18 (undatiert, 1999?).	
1999	Gymnocalycium ochoterenai var. longispinum nom. nud.	

※ 太字は有効に学術記載されたもの

分からない品種

G.ochoterenae 変種の学名を当てはめているもので、ポリゴナム、キレニウム、テニユイスピナムと呼ばれているも不明な種が、日本で流通しています。これまでの情報では、ポリゴナムは、Uhlig







写真 18~20:ポリゴナム(左)、G.ochoterenae 類縁種かどうか不明。筆者栽培・撮影、キレニウム(中)、G.ochoterenae v. cinereum では無いと思われるが、G.ochoterenae 類縁種かどうか不明。谷山 宰氏栽培・撮影、テニユイスピナム(右)、正伝氏由来のもの、G.stellatum 系と思われる。筆者栽培・撮影。

の輸入苗が起源の特殊なタイプ。キレニウムは、Mesa の輸入種子によるものではないかと考えていますが、これらの種が、G.ochoterenae 類縁種なのか、交配種なのかは、不明です。京都シャボテンクラブの会報に載っていた、G.ochoterenai var. tenuispinum は、G.stellatum(=G.quehlianum sensu Metzing)と考えています。

G.ochoterenae か、**G.ochoterenai** なのか

Backeberg 氏の最初の学術記載やその後の亜種や変種の学術記載では、G.ochoterenai となっています。趣味家に取っては、どちらでも良いのですが、分類学者には、重要なことらしいですので、一応書いて見ます。ある人にちなんで学名をつける場合、人名が母音または-er で終わる、名詞として用いる形容語は記念される人物の性と数に応じた語尾変化を与えられることで作られる。(男性であれば末尾に-i、女性であれば、-ae が来ます。しかし、例外があり、名前が a で終わる場合は、男性でも女性でも、-e(単数)、または-rum(複数)を使うのが良い。(国際植物命名規約勧告 60C(a)) Ochoterena 氏は男性で、末尾が a ですので、G.ochoterenae が正しいことになります。

AGG の雑誌 Gymnocalycium の付録(Gymnocalycium 13 (Suppl.1): 1-12(2000))の Etymologien der Taxa der Dattung Gymnocalyium「ギムノカリキューム属の分類学種の語源学」によると、ochoterenae:メキシコ人植物学者で、1915 年からメキシコ大学植物研究所所長 Isaac Ochoterena 氏(1885-1950)に因む、アルゼンチン産植物が G.ochoterenae というのは本当とは思えない。とあります。

分布地図

筆者が作成した、Field 番号の情報による **G.ochoterenae** 類縁種の分布地図を最後のページに示します。 AGG は、**G.intertextum** は、花の構造が似ていることから、**G.bodenbenderianum** sensu stricto(和名;快竜丸)の亜種と考えています。 Graham Charles 氏は、**G.bodenbenderianum** sensu stricto は、**G.riojense**(和名;守殿玉) (=**G.bodenbenderianum** sensu Kiesling)と同じと考えています。

おわりに

狭い意味に捉えても、分類学種 **G.ochoterenae** は、非常に変異に富んでいる種です。確実に和名; 武勲丸であると言われた種を特定出来ない段階ですので、結論は出せないですが、武勲丸と呼ばれて いた植物は、**G.ochoterenae** の中でも、平均的な固体では無く、変種や品種として考えても良いよう な特別な個体であつたのでは、と考えています。また、**G.riojense**(和名;守殿玉)

(=G.bodenbenderianum sensu Kiesling)系統のものが、間違って武勲丸とされた場合もあったのではないかと思われます。G.ochoterenae var. cinereum とされている植物のようなものが、武勲丸の可能性があります。しかし、現在、子苗しか、観察していませんので、はっきりしませんが、少し違うようにも感じています。

最後に、本稿を書くに当り、写真などの情報を提供して頂いた、谷山宰氏、ドイツ語文献の翻訳を 提供して頂いた、島田寿男氏に感謝します。

参考文献

C.Backeberg; F.M.Knuth, Kaktus-ABC (1935)

伊藤芳夫;サボテン図説(Explanatory diagram of Austroechinocactinae)(1957)

C.Backeberg; Die Cactaceae Band III (1959)

C.Backeberg; Cactus Lexicon (1966)

伊藤芳夫;サボテン科大図鑑(1981)

B.Schütz; Die Gattung Gymnocalycium (1992)

H.Till; Gymnocalycium intertextum Backeberg ex Till, Gymnocalycium 2(1): 9-12 (1992)

H.Till; Die Art des Gymnocalycium bodenbenderianum Aggregates - 1.Gymnocalycium bodenbenderianum sensu stricto, Gymnocalycium 3(5): 67-70 (1992)

H.Till; G.Neuhuber, Die Arten des Gymnocalycium bodenbenderianum Aggregates - 2. Gymnocalycium ochoterenai und seine Formen, 4(5): 71-76 (1992)

W.Papsch; Die Arten des Gymnocalycium bodenbenderianum Aggrigates - 3.Gymnocalycium vatteri und seine Formen, 6(1): 77-82 (1993)

H.Till; Noch einmal Gymnocalycium intertextum Erganzung und Nachtrag zu, Gymnocalycium 2(1): 9-12 (1989), Gymnocalycium 6(1): 83-84 (1993)

H.Till,Urs Eggli ; Etymologien der Taxa der Dattung Gymnocalyium, Gymnocalycium 13 (Suppl.1) : 1-12 (2000)

W.Papsch; Gymnocalycium Check List (2000)

日本植物分類学会;国際植物命名規約(ウイーン規約)日本語版(2006)

W.Papsch; Gymnocalycium AIAS (Associazione Italiana Amatori Piante Succulente) (2008)

G.Charles ; Gymnocalycium in Habitat and Culture (2009)

